

受験番号				

座席番号			

(試験開始の合図の後に記入)

成城中学校入学試験問題(第三回)

国語

(配点一〇〇点)

令和八年二月五日 八時五〇分—九時四〇分

注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は全部で23ページあります。
- 3 解答には、必ず黒色えんぴつ(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 4 解答は、必ず解答用紙の指定の欄らんに記入しなさい。
- 5 問題冊子、解答用紙それぞれの指定の欄に、受験番号と座席番号を記入しなさい。
- 6 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号などを記入してはいけません。また解答用紙の余白および裏面りめんには、何も書いてはいけません。
- 7 文字数の指定のある問題は、句読点などの記号も一字に数えます。
- 8 問題冊子の余白は、下書きに使用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 問題冊子、解答用紙はどちらも持ち帰ってはいけません。試験終了後しゅうりょうご、必ず提出して下さい。

問題は次のページから始まります。

【一】 次の問いに答えなさい。

問1 次の――部について、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。(ていねいにはつきりと書くこと)

- ① 大義名分が立つ。 ② 会長就任の要請をコジする。 ③ 知らない土地でマイゴになった。
④ 外資系の会社にツトめる。 ⑤ ほおが赤みをオびる。

問2 次の故事成語について、その意味が誤っているものをア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 馬耳東風 ―― 他人の意見に流されずに独立して集団を率いること
イ 朝三暮四 ―― うまい言葉や表現を用いて人をだますこと
ウ 鶏口牛後 ―― 大きな組織の末端よりも小さな集団の長の方が良いこと
エ 臥薪嘗胆 ―― 目的達成のために長期にわたって我慢を重ねること

問3 次の――部について、意味の上から誤っている表現をア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

友人が負け惜しみを言ってくるので、僕は眉をひそめる。級友たちも、よく減らず口を叩く元気があるものだと思つて呆れ果てて顔を背け、次々に首をもたげた。さすがに友人も、鼻白んだ表情をしていた。

問4 次の□には共通して同じ漢字一字があてはまる。慣用句の意味として適当なものを、あとのア～オのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① □が利く。
② □が引ける。
- ア 驚きおそれる イ 細かいことに注意がいく ウ 大体において効果がある エ 物事に動じない オ 遠慮してしまう

問5 次の「~~~~」 「て」の意味に最も近い「て」を含んだ文を、あとのア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

「これだけ練習してまだ元気だとは驚きだ。」

ア 疲れて立ち上がるのも億劫だ。

イ 友だちはピアノを弾いて僕は歌う。

ウ 早起きをして勉強しようとは思うが難しい。

エ 知っていて教えないのは意地が悪い。

問6 次の「□」にあてはまることばを、それぞれ三字で答えなさい。

① 昨日の打ち合わせの場面で、社長に「明日の都合はどうですか」とあなたは質問していましたが、「明日の都合は□ですか」と丁寧に述べるべきでした。

② 最近めっきり寒くなったので、お客様に「どうぞ、コートを着てください」と勧めていたのは素晴らしいのですが、「どうぞ、コートを□になってください」と言った方が良かったと思います。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

立ち止まり、立ちすくみ、後ろむきに過ぎ去つてしまふ。

(注一) あの悪夢のような事故の日から、ほぼ一年が過ぎた。私とコータは五年生に進級し、クラス替えはあつたものの、同じ先生の同じクラスになつていた。加害者と被害者と責任者。事故以来、構図はがっちり固定され、その関係はおそらく卒業まで続いてしまふ……そう考えて暗い気持ちになつた。

また、夏がやってきていた。

今、私は、待ちかねていたような、けれど同じくらい恐れていたような日を迎えていた。

星の王子様との約束の日だ。

去年と同じホテルで、また(こども天文教室)に参加したいと言つたら、母は何も聞かずに承知してくれた。たぶん、あの夜のすばる君とのやり取りを、父から聞いていたのだろう。父は仕事の都合で来られず、母と二人で参加することになった。

けれど集合時間のロビーに、あの光り輝くような少年の姿はなく、いったい私は何をしにここまで来たのだらうとため息をついた。今の私に星を見ることはできない。天体望遠鏡を覗いたところで、見えるのはうすばやけておぼろに光る何か、だ。もちろん二重星なんてわかるはずもない。

それでも私は母と屋上に行き、ぼんやりと空を見上げてみた。今はかけていても意味のない眼鏡をはずしてみる。

いつだったか、『真つ暗なの?』とカナちゃんに言われたように、降るような星空はどこかに消えてしまつていた。今、私の世界は完全に、闇に閉ざされている。

見えていない星は、宇宙は、ないのと同じだ。見えていないものは、どうしたつて目指せない。

ぶるりと震え、すぐそばにいる母の腕につかまろうとした時、私は歓声と共に誰かの両腕に抱きしめられていた。

「美星! 良かった、また会えた。遅れてごめんね」

すばる君だった。相変わらず距離感がおかしい。危うく手に持っていた眼鏡を取り落とすところだった。でも、この近すぎる距離なら顔がちゃんと見える。

やつと会えた。また会えた。胸がいつぱいになり、それからふと泣きそうになる。

「……ごめんね、約束、守れなくなっちゃった。私もう、宇宙飛行士にはなれないよ」

昨年のあの事故のことを、言い訳のように説明する。怪我をしたのは右目だけど、左の方も見えないの……。

そう伝えたところで、すばる君は「ああ」とうなずいた。

「そういうえば美星は、もともと左の目が悪かったんだってね」

——それは、今まで散々被害者面をしていた人間が、「お前こそが真犯人だ」と名探偵から指をさされたような瞬間だった。

小学校の就学時健康診断の時、色んな数値を測るために並ばされている中、視力検査のところでは縮み上がってしまった。前の方に並んだ子が、検査をしているおじさんからきつい言葉を投げかけられたのだ。

『なに？ 聞こえない。もっとはつきり、大きな声で。え、なに、見えないの？』

それで恐怖にかられた私は、とっさに見える範囲の部分^{はんい}を全部、丸暗記してしまった。私にはそういう、妙な特技があったのだ。

そして私はできるかぎりはきはきと大きな声で、さされた部分の〈正解〉を言い当てた。結果、両目ともに1・5。何の問題もなし、ということになってしまった。

その怖いおじさんは毎年健診に現れ、そして私は毎度同じ手段で難を逃れていた……逃れていた、つもりだった。

そのつげが、後に取り返しのつかない負債^{ふさい}となることも知らずに。

事故後に買ってもらったタブレットで私は、色んなことを調べ、そして知った。

私のように生まれつき、片方の目だけが極端に悪いケースは、たぶん不同視弱視だと思われる。そんなに珍しいことではなく、できるだけ早く見つけることが大切だと書かれていた。なぜなら、適切な治療を行えば視力が改善される可能性があるのだから。

だが、視力発達の感受性期に行く必要がある、そのタイムリミットは八歳頃、なのだそうだ。

あの事故があった時、私はじきに十歳になろうとしている九歳だった。弱視治療用眼鏡は高価だから、助成制度がある。けれどそれも九歳未満であることが条件で、だから私の両親はその恩恵は受けていないだろう。

何もかもが、手遅れだったのだ。

もし、最初の時点で正直に見えないと伝えていたら。すぐに適切な治療が受けられ、矯正すれば1・0のラインはクリアできていたかもしれない。その後怪我をしたとしても、今のような最悪の状況には陥らずに済んだはず。いや、もしかしたら、あの事故そのものを、回避で

きてさえいたかもしれない。

いくら悔やんでも悔やんでも、時間は絶対に巻き戻らない。だから今日は、すばる君に謝りに来たのだ。約束を果たせないことを。

けれど私の話を聞き終えた彼は、すごく明るい笑顔で言った。

「大丈夫だよ、あきらめることないって。ほら、^(注3)バンも言ってるでしょ。『オイラは絶対あきらめない。オイラがゼーんぶ手に入れる』ってさ。だってオイラたちが宇宙飛行士にチャレンジするのって、まだまだずーっと先なんだよ。二十年も、もしかしたら三十年も先のことなんだよ。そんだけの時間があったらさ、美星の目を治せるようになってるかもしれない。すごい眼鏡ができてるかもしれない。宇宙開発だって進んで、火星移住が始まるかもしれない。そしたら宇宙に行ける条件なんて、今より緩くなってるかもしれない。だから、ね」

すばる君は満面の笑みを、私の目と鼻の先に近づけてきた。

「あきらめなくて大丈夫。オイラたち二人で、絶対宇宙に行こう！」

絶句というのは、こういう時に使うのだろう。

あまりの前向きさ、ポジティブさに笑いそうになり、それに近すぎる距離に耐えられず、^{III}そつと脇を向いて手に持っていた眼鏡をバリアのうにかけてみる。

こんな風に明るく軽く言われちゃったら、どす黒く悩み続けていた私の一年が、まるきり馬鹿みたいじゃないの……。ちよつとだけ恨めしい気持ちになりながら、私は尋ねた。

「なんで私の左目が悪いって気づいたの？」

すばる君は「ああ」と笑う。

「天体望遠鏡を覗いた時、最初左で見て、あれって感じで首を傾げて、それから右で見直してたでしょ？ だからもしかしてって思ってた」
よくもまあ、そんな細かいことに気づく。そして一年も覚えている。本当に名探偵みたいだ。彼はきつと、他にも多くの特別な才能を持っているのだろう。

初めて会った時、彼のことを、星みたいにきれいで憧れるけど、とても手の届かない人だと思った。けれど今の印象は少し違う。彼は太陽そのものだ。明るくて生き生きとしていて、周囲にまで伝わる熱量を持っていて……そしてやっぱ手が届かない。

だけど星は見えない私にも、お日様の熱は届く。真昼間の太陽はまぶしすぎても、夕陽や朝陽なら嫌でも目に入ってくる。

「……これからも、友達でいてくれる、すばる君？」

別れ際、私から顔を近づけてそう言ったら、太陽の王子様は光り輝くような笑顔を浮かべて「もちろん」と言った。それから茶目っ気たっぷ

りに片目をつぶり、「ああ、惜しいつ、ハズレだよ」と付け足す。それが名前のことを言っているのだと気づき、「じゃあほんとの名前は？」と尋ねても、やっぱり「ナイショ」とはぐらかされてしまった。まさかのプレアデス、なのかしら？ あんまり名前つぼくないけれど。それにしても、これだけ親しげにふるまうくせに、一年たっても名前さえ教えてくれないなんて……。

③ 光り輝く特別な王子様は、やっぱり常人にはとうてい計り知れないのだった。

旅行から帰った私は、親に頼んでお世話になってる眼科に連れて行ってもらった——隠していたことを、正直に伝えるために。聞き終えて、先生は穏やかな声で言った。

「おそらく、そういうことじゃないかと思っていました。片方の視力に問題がない場合、見逃されてしまうことは意外と多いんですよ。もちろん、早く見つけるに越したことはありません。ですが、八歳頃までというのはあくまでも目安で、それを過ぎたら治療は無駄、ということではありません。大丈夫、この一年の努力は無駄にはなっていません。先ほどの検査結果ですが、左目の視力が少し上がっていましたよ。右目の状態も良くなってきていますし、人間の回復力を信じて、この調子でがんばりましょう」と。

その言葉に、思わず泣いてしまった。私の背中にそっと手を添えた母もまた、泣いているのだった。帰り道、母に手を引いてもらいながら、考えた。

私はずっと、左右の目で違う世界を見ていたのだ、と。クリアで明快で自信に満ちた世界と、うすぼやけて不安で頼りない世界。その両方を、行ったり来たりし、いつしか二つの世界で私は分裂していた。ふしぎな万能感に満たされ、自分を特別だと思い、クラスメイトを見下していた私。そしてそんな自分を嫌い、恥じ、劣等感を抱えた私。ある意味それでバランスが取れていたのが、あの事故を境に一変してしまった。

④ 哀しくて悔しくて恥ずかしくて。混乱し、波立つ心のごくごく片隅に、ほんのちよつとだけ安堵する私があった。

ああこれで、将来私が宇宙飛行士どころか、何者にもなれなかったとしても、それは私のせいじゃない——不幸な事故で、目を怪我したせいだ。夢を叶えられないのは、コータのせいなのだ、と。

うすうす気づいていた。実は私は大した人間じゃないんじゃないか、と。あの満天の星の下で、特別な人間とはどういうものかを目の当たりにしてからは余計に、そう感じていた。私なんて特別でもなんでもない、彼が主人公でヒーローなら、私は名前もクレジットされないような脇役の一人にすぎないんじゃないか、と。

もちろんそんなことはないと思いたくて、できる、なれると思ひ込みたくて、けれどやっぱり自信がなくて……。

そんなゆらゆら揺れる不安な日々を、強制的に終わらせたのがあの事故だった。

ほんのちよつとだけ。だけど確かに、私は心からほつとしたのだ。

コータとのいびつな関係を終わらせたなら、私たちはまっとうな友達になれるだろうか、と。

「コータのコウは、すばるの『コウ』」

口の中だけでつぶやきながら、私はぐるぐると考え続けている。

コータには、旅行のお土産みやげを買ってきていた。ホテルの売店に売っていた、星の写真のオリジナルキーホルダー。もちろん選んだのは、(注4)ブレアデス星団だ。

二学期になったら、あれを渡して。そしてコータとちゃんと話をしよう。ちゃんと目を見て。

今は昼間で、季節も正反対で。それでなくても、この先私がすばる星の輝きを見ることはきつとないだろうけれど。

⑥ 太陽の強い熱を背に受けて、私は見えない星に向かって歩いていく。

〈加納朋子『空をこえて七星のあなた』(集英社文庫)による。〉

(注)

1 あれの悪夢のような事故——コータともう一人の男子がぶざけ合っていた時、コータが振り回した木の枝が「私」の右目を傷つけた事故のこと。

2 二重星——極めて接近した位置にある二つの星。

3 バン——物語における人気漫画『BAMBOO伝説!』の主人公。『オイラは絶対あきらめない。オイラがゼーンぶ手に入れる』は、バンの決め台詞ゼリぶ。

4 プレアデス星団——おうし座にある星の集まり。和名は「すばる」。

問1 —— ① 「同じくらい恐れていた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 一年ぶりにすばる君に会えると期待する反面、約束を守れないと伝えた時にすばる君がどんな反応をするか心配だったから。

イ 自分は会えるのを楽しみにしているけれども、すばる君は自分のことを忘れているかもしれないと気がかりだったから。

ウ 再会をずっと心待ちにしてきた一方で、すばる君と会っても気づけないかもしれないという不安があったから。

エ すばる君と会えるのはうれしいと思うものの、自分がコータのことを傷つけてしまったことを隠かくしているのが後ろめたかったから。

問2

②「今まで散々被害者面をしていた人間が、『お前こそが真犯人だ』と名探偵から指をさされたような瞬間」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 事故のせいだと責任転嫁してきたが、そもそも今のような状況を招いた原因は、自分の弱さや過去の行いにあったのだとすばる君に指摘されたと感じたということ。

イ 自分のせいで事故にあったのを隠して、コータのせいで事故にあったと責任をなすりつけてきた自分の醜さをすばる君に見抜かれたと思ったということ。

ウ もともと左目が悪かったことを伝えなかったのは怖いおじさんのせいだと思ってきたが、それは言い訳に過ぎず、勇気を出せば良かっただけだとすばる君に非難されると感じたということ。

エ 事故のせいで約束を守れなくなったというその場しのぎの説明は通用せず、左目が悪かったことをすばる君に隠していたことまで気づかれていたとわかって衝撃を受けたということ。

問3

には、次のA～Dの文が入る。それを正しい順序に並べ替えたものを、あとのア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 全然見えない……怒られる！

B それで片手でまず右目を塞いでみて、愕然とした。

C 黒い輪っかのどこが欠けているかを当てられないと、あの怖いおじさんに怒られる……幼い私はそう理解した。

D 目を片方塞いで物を見るなんて、それまでやったことはなかった。

ア A | C | B | D イ B | D | C | A ウ C | D | B | A エ D | C | A | B

問4

③「光り輝く特別な王子様は、やっぱり常人にはどうい計り知れないのだった」とあるが、「私」は「すばる君」のことを、どのように捉えているのか。それを説明した次の文の Y・Z にあてはまることばを、本文中からそれぞれ十字で抜き出して答えなさい。

一年前に会った時は、星みたいにきれいだと思って憧れるだけだったが、二度目の出会いを経て、彼の輝きは Y を持っていることによるものだと考えるようになる。しかし、彼のことを Z だと感じている点は変わらない。

問5 —— ④「哀しくて悔しくて恥ずかしくて。混乱し、波立つ心のごくごく片隅に、ほんのちよつとだけ安堵する私があった」とあるが、「ほんのちよつとだけ安堵」したのはなぜか。その理由を六十字以内で説明しなさい。

問6 —— ⑤「そしてさらに、虫のいいことを考えてしまう」とあるが、ここでいう「虫のいいこと」とは具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

- ア コータに八つ当たりしてきたことを謝罪して、自分もコータの過ちを許せば、昔のように仲良くなれるのではないかということ。
- イ コータが馬鹿にされていたのは自分のせいなので、同じ加害者として理解し合える本当の友達になれるのではないかということ。
- ウ コータにこれまで助けてもらった感謝の思いを伝えることで、この先もずっとこのままの関係でいられるのではないかということ。
- エ コータのせいにして自分の不安を解消してきたが、本当は自分にも原因があったと伝えることで対等な関係になれないかということ。

問7 —— ⑥「太陽の強い熱を背に受けて、私は見えない星に向かって歩いていく」とあるが、この表現に関して授業中に交わした生徒たちの発言ア～エのうちから、「私」の様子について最も適当に説明したものを選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A —— 「太陽の強い熱を背に受けて」というのは、考えさせる表現だね。「私」は、コータに会いに行くのが本当は怖いと思ってる。でも、コータに償いをしないといけない、その罪悪感にじりじりと焼かれるような思いをしているってことだと思っただよね。

イ 生徒B —— いや、直前に「季節も正反対で」とあることに気をつけた方が良さそうだよ。すばる星が見えるのは冬だから、その冬に向かつて行くために、真夏の太陽を背中に受けているということだと思っただよ。

ウ 生徒C —— 確かに、すばる星は大切なポイントだと思う。とはいえ、それを「見えない星」と表現していることの方が重要で、見えていないものは、どうしたって目指せないと後ろ向きに生きていた「私」が、太陽のようなすばる君とのやりとりで背中を押され、自分の足で歩き出さないといけないと決意を固めている場面だと考えたいな。

エ 生徒D —— わかってないなあ。「見えない星」であるすばる星は、ここでは、本心がはつきりしないコータのことを指しているんだよ。だって、「私」はコータに会いに行くんだから。直後に「ちゃんと目を見て」とあるように、これまでは目を背けていたコータと向き合う覚悟を固めつつある「私」の気持ちを踏まえないと文脈に合わなくなっちゃうよ。

問8 表現と内容に関する説明として適当なものを、次のア～オのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア ⅰ 「降るような星空はどこかに消えてしまっていた」という表現は、この話のテーマでもある星空に心情を重ね合わせることで、すばる君に会えなかった絶望にうちひしがれている「私」の様子を印象的に描いている。

イ ⅱ 「そして私はできるかぎりはきはきと大きな声で、さされた部分の〈正解〉を言い当てた」の「はきはき」は、「私」の出した正解が、その場に出した正しい答えではなく、事前に見て暗記したものに過ぎないことを示している。

ウ ⅲ 「そつと脇を向いて手に持っていた眼鏡をバリアのようにかけてみる」の「バリアのように」という比喩は、自分の苦しみを理解してもらえないでいる「私」の孤独を表すものとして機能している。

エ ⅳ 「クリアで明快で自信に満ちた世界と、うすばやけて不安で頼りない世界」という対比は、自分は特別な人間だと周りの人を見下しながらも、実際のところ、自分には夢を叶える力がなく大したことのない人間だと自信を失っている「私」の繊細な心のありようを浮かび上がらせている。

オ ⅴ 「コータのコウは、すばるのコウ」というつづきやきは、自分にとつて特別なプレアデス星団とコータを重ねることで、本当はコータが自分を導いてくれたのだと「私」が実感していることを表している。

問題は次のページに続きます。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

星空の世界を科学として考える。そのために、星の運行のあり方を一つのシステムと考えて、そこに数学的知識を活用する。その結果として、星空の世界を直接目に見える美の世界ではなく、音楽的調和の世界として感じるようになる――。

これがまず古代ギリシアの文明において独自の形で展開した考え方の大きな道筋です。さきほど、夜空のギリシア神話の星座がもつとも広く活用されるようになったのはどうか、という問いを立てましたが、その答えは要するに、ギリシアで発達した科学としての天文学こそが、今日まで私たちの標準となる天文学的思考法の祖であるので、その科学の基盤となったギリシア神話まで、共通の言語になったのだと考えることができます。

とはいえ、宇宙の星の姿から科学的、数学的システムを考案し、そこに音楽のような調和の美を見出すとして、それがなぜ「宇宙の中での人間の位置」という哲学の問題意識に重なるところまで進むのか。このことを理解するためには、いろいろな手段があると思いますが、ここでは古代ギリシアを代表する哲学者プラトンと、その師にあたるソクラテスの思想について学ぶのが、近道だと思います。というのも、そもそも「哲学」は「フィロソフィー」という言葉を紀元前五世紀頃のギリシアで生み出したのが、この二人の哲学者であったからです。彼らはどうやって神話から科学へ、そして科学から哲学へ、という道筋を進んだのでしょうか。

まず、「哲学」という言葉ですが、この日本語はいまでもなく漢字で書かれています。しかし、これはもともと中国や日本にあった古い言葉ではありません。この言葉は江戸時代末期から明治時代初期にかけて、西周という人が、西洋の「フィロソフィー (Philosophy)」という言葉^①を翻訳しようとして、新しく作り出した和製の漢語です。西は江戸末期の幕府からオランダに派遣されて、当時の西洋の学問の全体像をしつかりと学び、それを日本語に翻訳して紹介するよう求められました。一九世紀中頃の西洋は、産業革命や資本主義経済が大規模に発達するとともに、科学や技術の領域でもきわめて専門的な知識が体系的に組織化されていて、世界の文明の中心になっていました。

これにたいして日本は、江戸時代末期までの約三〇〇年間、外国との通商や学問の移入を禁じる鎖国状態にありましたから、西洋の学問の全体を習得し、それを紹介するという西の使命は、非常に大きな困難を伴ったものでした。しかし彼は当時のヨーロッパで出版されていた「百科事典」などの資料を積極的に活用して、哲学、物理学、化学、生物学、医学、数学などあらゆる分野についての紹介を行うとともに、それぞれの学問分野での基本的な用語や概念をも日本語に置き換えて紹介するという、ある意味ではきわめて驚異的な作業を成し遂げたのです。しかも西は西洋の諸学問の中心には、「哲学」という、これまで東洋では考えられてこなかった学問の見方があり、それが一切の科学の分野の基礎になっているということを明らかにしました。彼は哲学の中で使われる基本的な用語（たとえば「観念」とか「実体」など）についても、日本語での表記を考えましたが、彼の用語法はそのまま当時の東アジアの共通の言葉となったので、哲学の主要な用語（和製の漢語）はいまでも中

国と日本で共通です。

さて、西は「フィロソフィー」という西洋の言葉を「哲学」という日本語に移し替えたのですが、この哲学という意味での「フィロソフィー」という言葉そのものを生んだのが、まさしくソクラテスとその弟子のプラトンです。古代のギリシアの言葉では、「フィロ」は「愛する」を意味していて、「ソフィア」は「知恵」を意味しています。そこで、ギリシア語で「フィロソフィア」は「知恵を愛すること」を意味します（英語での「フィロソフィー」、ドイツ語での「フィロゾフィー」などは、この言葉を受け継いでそれぞれの国語の発音に置き直したものです）。

もう少し詳しくいうと、ソクラテスやプラトンは「フィロソフィア」という言葉そのものを作ったわけではありません。この言葉は彼ら以前には、ギリシア語で「知りたがり」とか「好奇心」を意味していました。それを別の意味に変えて、「知恵を愛すること」という特別の言葉に作り変えたのが彼らなのです。

それでは、ソクラテスやプラトンのいう「知恵」とは何でしょうか。それはいわゆる「知識」のことでしょうか。私たちはいろいろな科学を学んで、豊富な知識をえます。もしも知恵が知識のことであれば、「知恵を愛すること」は「知識を愛すること」ですから、少し乱暴に言えば、哲学とは科学のような知的探究のことだということになりそうです。

ソクラテスやプラトンはそういう意味で「哲学」という学問を作り出したのでしょうか。そうではありませんでした。そして、ここに科学と哲学との非常に微妙な関係が隠されています。哲学は科学なしには誕生しなかつた。このことは間違いがありません。しかし、哲学は科学とは別の、独特な知的探究として考えられた。あるいはむしろ、科学の発展だけでは、知恵はえられないのではないかという反省から、哲学が生まれた。

彼らの「哲学Ⅱフィロソフィー」という言葉の創造には、このような複雑な考えが潜んでいます。そして、このことが、この本でのこれからの議論にとって、とても大事な点になります。

まず、ギリシア哲学の祖ともいべきソクラテスと、科学との関係は次のようなものでした。先に見たように古代ギリシアでは、神話や宗教の語る宇宙像とは別の、科学的な宇宙像として、地球を中心にした惑星の運動システムという新たな見方を生み出したのですが、このような天文学の発想が初めからギリシアの科学の原型だったというわけではありません。ギリシアの科学の原型は、「自然界の物質とその変化は、何を原因にして生じるのか、あるいは、何を元素として生じるのか」という問いの形をとりました。

神話の世界では海も川も山も谷も、神々が創造し、人間がそこに住んで神々とのさまざまなドラマを演じていきます。A、次第に自然をそうした神や人間の産物とは考えないで、あくまでも石や水や火などの物質からなる「自然界」と見る見方が出てきます。これが、ギリシアにおける科学の最初の形態でした。自然界を形成する物質の元素、そしてその変化や運動の原理、原因は何なのか。そう問うところから、神や人の意図や行動を離れた、科学としての自然の見方が生まれます。そしてギリシアの科学者たちは、自然世界の原理や原因を世界の「アルケー

(究極原因、あるいは究極の「元素」と呼びました。

B、ターレスという紀元前六世紀の科学者は、「世界のアルケーは水である」といいました。つまり、自然界のあらゆる現象を作り出している根源は、水の作用だということです。同じころのヘラクレイトスは、「世界のアルケーは火である」といいました。そして、少し後のデモクリトスは、「世界のアルケーは原子IIアトムである」といいました。アトムとは分割できないものという意味です。つまり、世界はそれ以上小さい部分に分割が不可能な、究極の物質の単位である原子からできていると考えたのです。この考えは、私たちの現代の物質観にも決定的な影響を与えていることが、すぐにお分かりいただけると思います。

さて、古代ギリシアの哲学を代表するソクラテスの「哲学」は、このような古代ギリシアの科学的探究の発展を背景にして、誕生したものです。世界はたしかに、科学者のいうアルケーによって生まれたり、動いたりしているのかもしれない。世界を構成している物質の単位は原子であるかもしれない。それは間違いなく非常に重要な知識であるにちがいない。しかし、これだけで世界の説明はすべて十分だといえるのだろうか。むしろ、このような説明だけでは、何か決定的に重要なものが抜け落ちていないだろうか。

私たちにとっては、科学的知識以外にも、もっと重要な知恵が必要なのではないのか——ソクラテスによる哲学という学問への呼びかけは、このような発想から出てきたものです。よく考えてみると、自然界を物質の要素によって説明する科学だけでは、十分な「知恵」であるとはいえない。なぜなら、私たち人間は、原子の塊かたまりでできているというよりも、むしろそのような知識を求める「魂」、あるいは「精神」を中核ちゅうかくとした、人格だからです。

⑥ そもそも人間の魂の働きがなければ、科学が教える知識というものはありえないだろう。世界についての知識が成り立つのは、それを生み出す魂の活動があるからに他ならないだろう。しかも、魂は物質的な原子のようにただ離合集散りしゅうしゅうさんを繰り返す、微細な運動体ではなくて、何が正しく、何が誤っているかを反省し、熟考する力をもった一つの特別な存在である。いいかえると、魂は何が科学的に真で、何が道徳的に善で、何が芸術的に美であるかを考える力をもった特別のものである。そうだとすれば、私たちは自然世界の構造や性質にかんする知識を得るよりも前に、まず、それを追求することのできる魂の能力について徹底的てってい底的に吟味ぎんみし、それが判定する真・善・美の意味についても、十分にしっかりとした理解を身につける必要があるのではないのか——。

ソクラテスが考えた「知恵を愛すること」としての「哲学」とは、非常に単純にいうと、この魂をめぐる反省、「魂への配慮ほいりよ」ということです。彼はこの反省作業がそれ自体、科学的探究とは独立の、一つのきわめて重要な知的探究であることを強調しました。そして、そのテーマが具体的には、「魂の能力への批判的な吟味」と、「魂が本来求めるべき価値への問い」という、二つの大きな柱からなることを示しました。人間の魂の能力とは、世界についての真理を探究するとともに、われわれの行動の善悪を判断する能力です。そして、魂の求めるべき価値とは、われわれが判断する善悪の究極のものことです。

ソクラテスが哲学に託したこの二つの課題は、彼以降現代の私たちの時代の哲学にまで、ずっと一貫して伝えられている、哲学のもっとも基礎的なテーマです。彼はたんに「フィロソフィー」という言葉に新たな意味をつけ加えたのではなく、まさにその根本的な課題を根底まで見抜き、その課題の意義と重みとを明確に浮き彫りにしたという意味で、歴史の中に哲学という学問の誕生をしっかりと刻み込んだのです。その意味でソクラテスは、古代のギリシア人やローマ人にとつてのみならず、二五〇〇年近く後に生きる私たちにとつても、哲学という知的探究の創始者なのです。

（伊藤邦武『宇宙はなぜ哲学の問題になるのか』（ちくまプリマー新書）により、見出しは省略した。）

問1 ——— ①「音楽的調和の世界として感じるようになる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの

うちから選び、記号で答えなさい。

ア 天文学が発達することによって、数学的システムに基づいていたこれまでの星の見方からの脱却が果たされたということ。

イ 目で見えるままの星空ではなく、別の見方から星の運行を一つのシステムとして科学的に捉えるように考え方が変わったということ。

ウ 夜空に広がる星をそのまま見るのではなく、星と星を結び合わせてギリシア神話の星座の世界をうみだし、その美しさを感じられるようになったということ。

エ 空に瞬く星々にギリシア神話の星座の世界を重ね合わせることで、それらが調和した美についても天文学的な思考法で分析可能になったということ。

問2 ——— ②「西洋の『フィロソフィー (Philosophy)』という言葉を翻訳しようとして、新しく作り出した」とあるが、なぜそうしなければいけなかったのか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア あらゆる分野における基本的な用語や概念を翻訳しようとすると、これまでの日本語だけでは足りなくなってしまうから。

イ 産業革命の発達を支えた西洋の学問の偉大さを伝えるためには、日本人の知らなかった言葉を用いた方が効果的だと考えたから。

ウ これまで鎖国状態だった日本が外国の科学や技術を理解するためには、東アジアの共通の言葉に置き換えて考える必要があったから。

エ 西洋の諸学問を日本に紹介するにあたって、その中心にあった見方が、これまで東洋では考えられてこなかったものだったから。

問3

③ 「それを別の意味に変えて、『知恵を愛すること』という特別の言葉に作り変えたのが彼らなのです」とあるが、筆者はどういうことを述べようとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 哲学は科学のような知的探究のことを指すので、彼らが一般的な好奇心ではなく、科学的探究心を意味する言葉として用いていたという事。

イ 哲学が科学の発展を背景に誕生したことは間違いないが、彼らは科学の発展だけでは知恵をえることがかなわないという課題を浮き彫りにしたということ。

ウ 哲学は科学に基づいた学問ではあるが、独自の発展を遂げているので、彼らが科学の用語を哲学でも用いるにあたって、新たな意味が付与されたということ。

エ 哲学が科学とは異なる知的探究であり、そのことを明確にするためにも、彼らは新たな言葉を作り出す必要があったということ。

問4

A

B

にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア A なぜなら | B したがって

イ A つまり | B だが

ウ A しかし | B たとえば

エ A だから | B まず

問5

④ 「古代ギリシアの科学的探究」とあるが、何を「探究」しているのか。三十字以内で説明しなさい。

問6 ———— ⑤ 「何か決定的に重要なものが抜け落ちているのではないだろうか」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その理由

として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 科学の発展に伴い世界を物質の要素によって説明することは可能になったものの、哲学の立場からは、それを可能にする人間についての理解が欠けていることは無視できないと筆者は考えているから。

イ 科学的知識に基づいて世界について説明しようとする人間も原子の塊かたまりだということになってしまい、特別な存在であることが見逃みのがされてきたことを、哲学の立場から許しがたいと筆者は考えているから。

ウ 科学は現代の物質観にも決定的な影響を与えているほどすぐれたものだが、哲学の立場からは、道徳的な善悪について考えることから目を背そむけてきたことへの反省がないように見えると筆者は考えているから。

エ 科学的探究においては自然界の構造や性質にかんする知識を増やすことを重視してきたため、様々な説が乱立してそれぞれの真偽しんぎが十分に検証されずにきてしまったことを、哲学の立場から批判すべきだと筆者は考えているから。

問7 ———— ⑥ 「そもそも人間の魂の働きがなければ、科学が教える知識というものはありえないだろう」とあるが、どういうことか。その

説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自然界を形成する元素が変化・運動する原理や原因を正確に理解するためには、人間が自然界に与えた影響の大きさこうりょを考慮する必要がある、人間の思考を前提に科学的探究がなされるべきだということ。

イ 世界の構造や性質は、物質の要素からだけでは説明することが困難で、人間が切り拓ひらいてきた社会についての理解も必要になるので、世界を人間の産物として考える視点が必要不可欠だということ。

ウ 自然界の構造や性質にかんする知識を得るよりも前に、人間が何を真で善だと考えているのかを理解しておかなければ、得られた知識が正しいのかどうかを判断することはできないということ。

エ 世界についての真理を探究する行為こういは問いの形を原型としており、その問いを立てること自体、何が正しくて何が誤っているのかを判断する精神活動抜きには成立しないということ。

問8 次に示すのは、—— 「その意味でソクラテスは、古代のギリシア人やローマ人にとってのみならず、二五〇〇年近く後に生きる私たちにとっても、哲学という知的探究の創始者なのです」 について、このことが現在にどうつながっているのか理解を深めるために、ある生徒がまとめた【ノート】である。このことについて、あとの問いに答えなさい。

【ノート】

《科学と哲学》

●科学 ⇄ 神話・宗教

- ・ 神話の世界とは異なり、自然を神や人間の産物とは考えない。
- ・ 世界は、物質で構成されている。

●哲学

- ・ 科学だけでは **X** を得られない。
- ・ 人間は人格であり、物質の要素からだけでは説明できない。

Y



◎フィロソフィア **X** を愛する

- ・ 科学的知識への「好奇心」ではなく、科学的知識を可能にしている人間の魂の働きへの理解が必要。
- ↓ 魂が特別な存在なのは、魂が価値について考える能力をもっていることに由来する。

《感想》 私たちにとっての意味とは……

- ・ 科学技術は日々発展を遂げている。
- ・ それとともに、世界に関する知識も増殖ぞうしよくを続けているからこそ、それを用いる人間への理解が必要不可欠だ。

Z

(1) X にあてはまることばを、本文中から二字で抜き出して答えなさい。

(2) Y にあてはまることばとして最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 世界の真理を科学によって明らかにするだけでなく、科学的な真偽、行動の善悪、芸術的な美醜^{びしゅう}について判断し、その真や善、美の意味についても、十分に把握^{はあく}する必要がある。

イ 世界について科学的に探究するためには、まず、自然世界の構造や性質についての知識を得た上で、その真偽について判断する能力について、徹底的に吟味^{ぎんみ}する必要がある。

ウ 科学は世界を物質的に説明しようとするあまり、科学の基盤となったギリシア神話の星座をはじめ、神や人への配慮がなくなってしまうことを反省する必要がある。

エ 科学が示す自然界の根源について、何が正しく、何が誤っているかを反省し、熟考するという批判的な姿勢に欠けてきたという課題を真摯^{しんし}に受け止める必要がある。

(3) Z にあてはまることばとして最も適当なものを、次のア～エのうちから選び、記号で答えなさい。

ア 自然界を正確に理解するためには客観的思考が重要で、それを可能にしているのが人間の魂の働きなのだと考えると、真理を探究するためには哲学的思考を身につける必要がある。だから、現在でも哲学について学ばなければならぬだろう。

イ 世界が抱^{かか}えている課題はますます複雑さを増している。それを科学的に解決していくためには、人間の魂の働きへの配慮がますます大切になっていくので、それに関する学問である哲学の価値も増していくにちがいない。

ウ 科学技術そのものには善悪が含ま^{ふくま}れないが、科学的探究は人間の魂の働き抜きには成し得ないことなのだから、その働きを批判的に吟味していかねばならない。それが哲学の現在における意義だと考えられよう。

エ 人間の魂の能力とは、何が正しいかを判断する、世界の真理についての探究を支える重要なものである。現在の世界に欠かすことのできない科学技術を発展させるためにも、哲学の重要性を理解する必要があるのではないか。

